

## イエスに目を留める ヘブル 3:1-6

1. そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。モーセが神の家全体のために忠実であったのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実なのです。(3:1-2)
  - a. 私たちができる最も重要な訓練の一つは、常にイエスに思いを向けることである。イエスのことを考える時、単にイエスのことを知ったり学んだりするだけでなく、私たちの心を通してイエスと超自然的な交わりを持つことができる。
  - b. 神は人間に語りかける手段として御使いを使われるが、イエスはあらゆる面で御使いよりも優れており、また律法を与えたモーセよりも、あるいは他のどんな書物よりも優れている。イエスは神の御言葉が肉体となったお方であり、私たちは霊的なレベルでイエスと交わることができる。
  - c. イエスは私たちに神を示すため神から遣わされた忠実な使徒であり、ご自身の体に世の罪を受けられた大祭司である。
  
2. 家よりも、家を建てる者が大きな栄誉を持つと同様に、イエスはモーセよりも大きな栄光を受けるのにふさわしいとされました。家はそれぞれ、だれかが建てるのですが、すべてのものを造られた方は、神です。(3:3-4)
  - a. 私たちはおそらくイエスがモーセに優るという事実に対して反論はないだろうし、そのようなことを聞いて（初期のユダヤ教からの改宗者のように）嫌な思いを抱くこともないだろう。たいていのクリスチャンは何の疑問もなくイエスはすべてに優る、と宣言できるだろうが、自分自身の生活を見直した時、本当に「（自分の好きなこと）」よりもイエスが大切だ、と言い切れるだろうか。
  - b. 神を信じている私たちも、意識して、あるいは無意識のうちに、人によって組み立てられた特定の神学的骨組みに固執してしまうことがある。それはクリスチャンになりたての頃得た知識、あるいは好きな先生が言った言葉、などかもしれない。私たちは得てしてそのような先入観に執着して神との関係を妨げてしまうことがある。
  - c. 私たちは、自分のいる家を建てた方は誰なのか、ということ意識する必要がある。それは私たちの人生のあらゆる面において適用すべき霊的原則である。
  
3. モーセは、しもべとして神の家全体のために忠実でした。それは、後に語られる事をあかしするためでした。しかし、キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし私たちが、確信と、希望による誇りとを、終わりまでしっかりと持ち続けるならば、私たちが神の家なのです。(3:5-6)
  - a. 私たちは神が建てられる家に入るよう召されているが、イエスにある信仰を持ち続けないとそのすばらしいコーリングも失ってしまう。これは条件付きの告知である。
  - b. 条件付きということは私たちは救いを失うのではないかと心配する人もいるかもしれない。しかし神が私たちに求めておられる条件とは完全に高潔になることではない。私たちが行いによって救いを得られないのと同様、道徳的に失敗したからといって救いは失われぬ。神が私たちに求めておられるのはイエス・キリストにある信仰を持ち続けることである。
  - c. イエスにしっかりと確信を持つ者は、神が永遠に続く栄光の家に入れてくださる。